

「いのちの水」 —多様な民族をひとつに結ぶイラワジ河—

写真・文
宇田有三
Yuzo Uda



朝早いイラワジ河。霧のかかる河を行き交う船を眺める人びと（イラワジ管区）

「ピンマナに行くのかい？」

ビルマ（ミャンマー）入国を控えた私に、知り合いの多くは、ほとんど同じ質問を投げかけてきた。唐突とも思える首都（機能）移転の話が伝わったのは昨年十一月のこと。この時初めて、首都ラングーン（ヤンゴン）の北三二〇キロに位置する地方都市ピンマナの名前が世界に伝わった。東南アジア最後の軍事政権の不可解な動きに、この国に関心を寄せる誰もがその背景を知りたがる。

足かけ一三年間、ビルマ取材を続けている。昨年もまた、ビルマ国内に二度、取材撮影に入った。春先に短期で一度、秋に長期で一度。印象に残ったことは数多くあったが、一番記憶に残っていることといえば、「これだ」と具体例を挙げようのない、なにかしら漠然とした居心地の悪さである。不安を生み出す土壌の再生産、それこそが軍事政権の正体かも知れない。

その二〇〇五年もまた、現地からは心を惑わすニュースが発信された—軍政主導の国民会議の再開と休会（二月・三月・二月及び翌年一月）、首都での連続爆破事件（五月）、アセアン会議議長国辞退（七月）、石油の大幅な値上げ（二〇月）。さらに、社会不安に留めを刺すように、首都の移転が実際に始まったのだ。

政治的には明るいニュースのほとんどないビルマ。そうはいつても、人びとは、そこで生活している。半世紀近く続く強権政



イラワジ河を流してきた材木をトラックに積み込む (マンダレー)



イラワジ河に浮かぶ船で生活する人びと。睡眠中寝返りに失敗して、河に落ちることはないのだろうか (マンダレー)



スキップしながら家と河を往復し、水汲み続ける女の子。幼い子どもであっても、家族の中の役割分担を果たす (マンダレー)

権の下で、一般の人びとはどのような暮らしをしているのか。その姿を見てみよう。ビルマ最大の河であるイラワジ河に暮らす人びとの生活を追ってみた。

頭の上にバケツを載せた女の子が、イラワジ河での水汲みから帰ってきた。家から水辺まで約三〇〇メートルの距離。水の重さでバランスをとって歩くことができなかったらしい。家にたどり着いたときには、バケツの水は半分以上こぼれて、なくなっていた。水運びをしている多くは、主に女性と子どもであった。

両肩に担いだ天秤棒の両端は、水がいっぱい入ったバケツで揺れていた。歩を進めるたびにバケツの揺れが大きくなり、水がこぼれる。水運びをしていた一〇歳くらいの男の子は、担いでいた天秤を下ろす。揺れて水がこぼれないよう、バケツの上にバナナの葉を静かに置く。再び天秤棒を持ち上げた彼の顔は一瞬、水の重さで引きつった。首都ラングーン(ヤンゴン)から車で約一時間、イラワジ河に近いデルタ管区のニャウソドンでのこと。

これとまったく同じような水汲みの風景を、隣国バングラデシュに国境を接するラカイン州でも見かけた。ラカイン州で見た水運びの瓶は特徴的だった。誰もがアルミ製の、徳利の形をした水瓶を使っている。連なった数十人の子どもたちが、キラキラ光る徳利を持って歩く姿は、ちょっと壮観



ザガイン丘陵からイラワジ河を見下ろす。悠久の流れとバゴダ（仏塔群）が目前に広がる（ザガイン）



全長 2000km を超えるイラワジ河の出発点ミッソン（カチン州の州都ミッシーナから約 45km。メーカ〔ンマイカ〕河とマリカ河の合流地点）



ビルマ最北に位置するカチン州。その州都ミッシーナ近郊のイラワジ河支流で水遊びをする子どもたち（カチン州）

カチン州訪問の目的の一つは、州都ミッシーナから北へ約四五キロに位置するミッソンと呼ばれる地域を訪れ、イラワジ河の出発点を自分の目で確認してみることだった。ミッソンに着くと、マリカ河とメーカ（ンマイカ）河の合流地点に立ってみた。取り立てて特徴のない中州の砂地が目前に広がるだけだった。そう、これこそがイラワジ河の出発点だった。この河が、インド洋につながっているのか。河の流れの穏やかさとこの国の政治の激動は反比例しているような感じさえする。

小さなボートに乗ってマリカ河を遡ろうとしていた人に、聞いてみた。

「ビルマは政治的な自由が制限されているため、取材活動もおのずと限られている。どのくらいの期間の滞在が許されるのか、あるいはどの程度の自由な撮影が可能か、入国前から、いつも気を揉む。」

これまでの訪問で、ビルマのほぼ全土―西はバングラデシュに接するラカイン州、チン州へ、東はタイと接するカレン州、モン州、タニンダーイ管区へ、北は中国に国境を接する最北のカチン州へと足を運んでみた。最終的に訪れたのは、カヤー州以外の、ビルマの行政単位である七州七管区のうち六州七管区に達した。日本の約一・八倍もある国土のゆえ、駆け足での訪問となった場所もある。



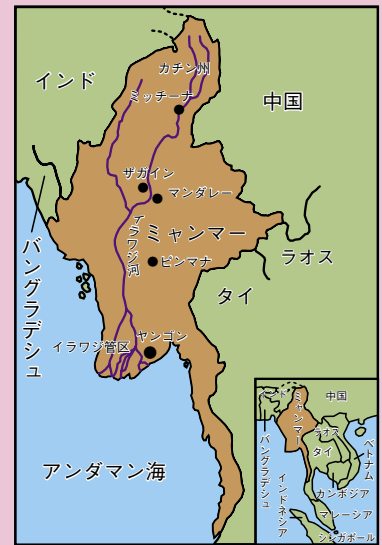
イラワジ河の傍の生活は北から南まで、それほど大きく変わることはない。水浴びと洗濯に精を出す（マンダレー）



ビルマの人びとの多くは、鹹水魚よりも淡水魚を好んで食べる。イラワジ河で捕れた魚を仕分けする（イラワジ管区）



ビルマで最も僧侶の多いザガイン。僧院からイラワジ河まで歩いて約10分。水汲みに出かける尼僧たち（ザガイン）



「バマルミヨラ？」（ビルマ人ですか）。
「ノー、チャノーカチンバア」（いいえ、カチン人です）。

私のつたないビルマ語に、やはりビルマ語で返事が返ってきた。私は、ビルマ国内のいろいろな場所を訪れたとき、この質問をすることになっている。返ってくる答えを聞くことによって、ビルマ国内の民族の多様性を確認している。「辺境」に行けば行くほど、時に、ビルマ語も通じないことが多くあるからだ。

イラワジ河は、その出発地点から南へ約二一六〇キロ、インド洋に注ぎ込むまで流れ続ける。北から南へ、河沿いに暮らす民族と言葉は、もちろん異なる。だが、その河沿いで暮らす人びとの生活自体は、あまり変わらない。誰もが、生活の基本である命の水を大切にしているのがうかがえる。

ビルマは、四〇（一三〇）を超える民族が入り交じる多民族国家。現在の軍事政権は、多民族国家をまとめるためには軍による力の支配（秩序）が必要だと強調する。その、軍部主導の憲法制定会議も、一九九三年開始以来、遅々として進んでいない。

人が生きていく上で、民族上の違いはこのイラワジ河沿いの暮らしにはほとんど感じられない。生活に不自由さがなければ、特に民族上の違いを強調する必要性はないのではなからうか。

（うだ ゆうぞう／フォトジャーナリスト）